

次のスライドから試行2が始まります。「試行2の終了です」というスライドまで音読を続けてください.

「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。」

こんどはメロスが嘲笑した。

「罪の無い人を殺して、何が平和だ。」

「だまれ、下賤の者。」

王は、さっと顔を挙げて報いた。

「口では、どんな清らかな事でも言える。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまえだって、いまに、磔になってから、泣いて詫びたって聞かぬぞ。」

「ああ、王は慥巧だ。自惚れているがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟で居るのに。命乞いなど決してしない。ただ、——」

と言いかけて、メロスは足もとに視線を落とし瞬時ためらい、「ただ、私に情をかけたつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えて下さい。たった一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰って来ます。」

「ばかな。」

と暴君は、嘎れた声で低く笑った。

「とんでもない嘘を言うわい。逃がした小鳥が帰って来るというのか。」

「そうです。帰って来るのです。」

メロスは必死で言い張った。

「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。妹が、私の帰りを待っているのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンティウスという石工がいます。私の無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いて行こう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに帰って来なかったら、あの友人を絞め殺して下さい。たのむ、そうして下さい。」

それを聞いて王は、残虐な気持で、そっと北叟笑んだ。

生意気なことを言うわい。

どうせ帰って来ないにきまっている。

この嘘つきに騙された振りして、放してやるのも面白い。

そうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも気味がいい。

人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。

世の中の、正直者とかいう奴輩にうんと見せつけてやりたいものさ。

「願いを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰って来い。おくれたら、その身代りを、きっと殺すぞ。ちょっとおくれて来るがいい。おまえの罪は、永遠にゆるしてやろうぞ。」

「なに、何をおっしゃる。」

「はは。いのちが大事だったら、おくれて来い。おまえの心は、わかっているぞ。」

メロスは口惜しく、地団駄踏んだ。

ものも言いたくなくなった。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。

暴君ディオニスの面前で、佳き友と佳き友は、二年ぶりで相逢うた。

メロスは、友に一切の事情を語った。

セリヌンティウスは無言で首肯き、メロスをひしと抱きしめた。

友と友の間は、それでよかった。

セリヌンティウスは、縄打たれた。



メロスは、すぐに出発した。

初夏、満天の星である。

メロスはその夜、一睡もせず十里の路を急ぎに急いで、村へ到着したのは、翌る日の午前、陽は既に高く昇って、村人たちは野に出て仕事をはじめていた。

メロスの十六の妹も、きょうは兄の代りに羊群の番をしていた。

よろめいて歩いて来る兄の、疲労 | 困憊の姿を見つけて驚いた。

そうして、うるさく兄に質問を浴びせた。

「なんでも無い。」

メロスは無理に笑おうと努めた。

「市に用事を残して来た。またすぐ市に行かなければならぬ。あす、おまえの結婚式を挙げる。早いほうがよかろう。」

妹は頬をあからめた。

「うれしいか。綺麗な衣裳も買って来た。さあ、これから行って、村の人たちに知らせて来い。結婚式は、あすだと。」

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

眼が覚めたのは夜だった。

メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。

そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。

婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらには未だ何の仕度も出来ていない、葡萄の季節まで待ってくれ、と答えた。

メロスは、待つことは出来ぬ、どうか明日にしてくれ給え、と更に押してたのんだ。

婿の牧人も頑強であった。

なかなか承諾してくれない。

夜明けまで議論をつづけて、やっと、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。

試行2の終了です